
SEENA 1

リナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SEENA 1

【Nコード】

N3666A

【作者名】

リナ

【あらすじ】

闇者^{ハルス}を憎み、倒す事だけを目的にした記憶のない少年ディオルが闇者と話す不思議な力を持つ少女ミアと出会い。止まっていた運命の歯車は少しずつ…回りはじめた。仲間達とともに刻む、時に明るく時に暗い、笑いあり涙ありの時を越えた物語。

プロローグ

ギイ……

少年は、木製で出来た古めのドアをしめ
ドサリと音をたて担いでいた荷物を下ろした。
上着を脱ぎ、髪を束ねていた紐を説く。

腰に刺さった古ぼけた剣を壁に立て掛けると、いつもは行くはずも
ないベットに足を運び、

横になった。

目を閉じ

気付けば

その少年は

真っ暗な所に居た。

ここは…夢…？なのか？

…オレは

夢を…見てるのか？

静かだ…

…とても静か

見渡す限り、

まわりには何も無い

“無”の世界だけが

広がっていた。

世界は

どおなっっていくんだろう

いつまでも尽きる事ない

“争い”に疲れたんだろうか……

だから

だから……

こんな事になったのか？

“色”が消えていく

取り戻しかけたオレの“色”を奪ってく

やめろ

やめろ!!

『……………逝くなよ……………』

…もしも

この願いが

叶う事がなくなったら

実現させてみせる

必ず

必ず

守ってみせる

無くしていたオレに再び
“色”をくれた

お前を

やっと出会えた今度こそ

二度と見失わないために

それはまるで

自分の心の声の様に

悲しみに満ちて

響いて

聞こえた

少年の瞳に、

眩しさが伝わる。

運命の歯車は

再び回りはじめた。

第一話アステイカの朝（前書き）

はじめまして！リナです。今回初投稿させていただいた小説ですが、ずっと書いてみたかったファンタジーです！頑張ります。そして話の中に出てくる、闇者聖者ハルス・セーナですが、完璧に読み方に無理がありますね…。ですがこの物語の中では宇宙と書いて《ソラ》と読む。そんな感じなんだと思っていただければうれしいです。長くなりましたが物語も楽しんでいただければ幸いです。

第一話 アステイカの朝

第一話

日が昇り、木々が揺れ、世界に朝が来た事を告げた。『チチチ・・・』

部屋にまで響き渡る小鳥達の囀りが、今し方までうなされていた肩より少し長めの、緋色の髪を持つ少年を眠りから呼び覚ました。こは、ラージスト大陸のやや南方に位置する、比較的暖かく気候がよい事で知られる町、アステイカ

その町の一宿屋の中の二階に、その少年はいた。少年はややつりあがった大きな灰褐色の瞳をもち、15・6歳くらいだろうが、顔にはまだ仄かにあどけなさを残しつつも、健康的に焼けた肌はいかにも“少年”という感じがした。しばしボくっとした後、宿屋に設置されている洗面所で顔を洗い、いつもの動きやすさ重視の紺色の生地、地に緑や黄色の模様の入った上着を着、絞ったような暗い黄色のズボンを履き、緋色の髪を雑に上に縛り上げ、使い古した剣を腰にさした。

「…何だっただんだ？あの夢…」
そしてポツリと呟く。

不思議な夢だった、誰かが“逝く”事を悲しむなんて、まずありえないのに

「おかしい事もあるもんだな。」

もう一度呟くと、部屋に一つだけの扉が、勢いよくノックもなしにガチャツ！と開いた。

「ディオ太！おっせえよ。」

言いながら、背の高い、日に透けると綺麗な緑色の髪をした、黒い瞳の青年が入ってきた。スラリとした見た目だが本当はとても鍛えられている事を少年は知っている。

「何一人でブツクサ言ってるの、ポエム大会はその辺で終了してちやっちやとルネントコ行けよ。」

「ツツ!! うっせえ! ポエム何か言ってるねえだろが!!!」

少年が怒鳴ると青年は楽しそうにニマリと笑い、

「はいはい、ディオル君は内緒にしたい年頃だもんね。ルネには黙つといたげるから、早く下行きなよ。雑用3倍になつても手伝わないよ?」

と言った、まるで子供に話かけてる様な口振りだ。

「だから言ってるねえ!!! わあつたよ! 行きゃいいんだろ、行きや。」

ディオルと呼ばれた少年は途中諦めたのか、反論するのをやめ、半ば投げ遣りの態度で言い放つと、頭一つ分程大きい青年の前を通り過ぎ、階段へと続く廊下を歩きはじめた。青年もディオルの後について歩きだす。

「いつまでもガキ扱いしやがって!!!」

階段に差し掛かった所で、ディオルはその青年に聞こえるか否か程度の声で呟く、「だってまだまだディオ太は子供だろ?」
聞こえていたらしい。

「2つしか違わねえだろがツツ!!!」

「そおやつてむきになんのがガキだつつの」

「こツツ!!! アホか!!!」

「アホはあんた達よ!!!」

女性の鋭い声が、言い合いながら下りてきた2人の会話を遮った。

「まったく! 全然下りて来ないから見に行かせたのに、ガウロ!!! あんた何してたのよ、早く呼んでこいって言ったでしょ!?!」

この黙っていれば美しい女性は、腰まで伸びたハニーブラウンの髪を綺麗な赤い飾りで片方だけまとめ、鮮やかな焦げ茶色の瞳をつりあげて、階段の下で2人を見上げていた。

「だってルネ、こいつってば1人でポエム作ってたんだぜ。」

くくく…。と笑いながらガウロと呼ばれた青年がディオルと共に階

段を下りながら言う。

「なッ！！てつめえ！“黙っとく”とか言っついて何あつさり言っ
てんだよ！！……っーかオレは言っつてねえつってんだろ！！」

「うるさいッ！！！！」

ふう……と、怒鳴った後にため息一つ。

「で？今日は任務の予定を変更して、2人で仲良くロープなしバン
ジージャンプでもする？」

顔はニコツと笑っているものの、冷えきった声で女性が告げた。

「ルネ！！俺が悪かった！！」

と、ガウロ。

「てか死ぬだろ！それ！普通に！！！！」「私は誰？」

2人の言葉は軽くスルーされ、

「ルネット」アヤセル隊長です……。「」

声を揃え、答える。

「そのとおり！で？バンジージャンプする??」

再度ルネットが言った相変わらずニコツとした笑顔に、冷たい声で

「……イエ、ゴエンリヨシマス。スイマセン。ほらっディオ太も謝っ

とけって！」後半はぼそりと、ガウロはディオルに耳打ちするよう
に言った。

「……モオ、ネボウシマセン。」

ディオルは渋々その言葉に従う。

「よろしい、今度から遅刻した者には罰則を与える事にするわ。」

「…………。」「」

もはや反論する気力すらない様子の2人を見て、やっと気が晴れた
のか、ルネットの声からは刺々しさが消えていた。そればかりか、
楽しんでるようにも感じる。

「今日は、この近くの口ナの森に闇者退治に行くわ。最近やたら
強い闇者が出るって噂を聞いたし。聖者探しは今日は無し。」宿屋
の店主の方へ向かいつつ、ルネットが言った。

「闇者ならいつも倒してんじゃねーか、そんな強い奴ならなんで昨

日の内に行かなかつたんだよ。」

宿泊代金を払い終わると小さめの皮の荷物を持ったルネットに、デ
イオルが聞く。

「その闇者の事を詳しく知りたかったのよ。実際、あまり確かな情
報は聞けなかつたけど、…でも、こんな町の近くじゃほつとく訳に
わいかないでしょ。」「どんな奴かなんて行ってみりゃ解んじやね
ーか！」

「まあまあディオ太、そおガツつかなくても結局今から行く事にな
つたんだから、ほらっちゃっちゃと自分の荷物持ってこいよ。それ
じゃ レッツ ゴー!!！」

ガウロは意気揚揚に宿屋から出ていった。

「おいっ！待てよガウロ！」

言うなり荷物を取りに階段を駆け上がるディオル。

「……はあ。」

それを見、ルネットは大きなため息をついた。

「今日も頑張れ、私。」

そして、誰にも聞こえないようにそう呟いたのだった。

第二話口ナの森まで（前書き）

こんにちは！ここまで読んでいただけうれしいです 楽しんでもらえてるでしょうか？…と言ってもまだ二話目ですけど>>笑 これからもっとおもしろくなる予定なんです！雑な文ですが読んでやって下さい

第二話 ロナの森まで

第二話

2人はガウロに続き宿屋を出、ロナの森とはまったく逆方向に進んでいた彼を見つけると、

ディオルがニマニマ笑うのを横目に。ルネットが再び厳しく説教をした。

そして3人はやっと目的地へ向かい足を進めた。

「まったく！方向も解らないくせにすぐ飛び出して！町にいるからって安心しきるなっていつも言ってるでしょ、どこで闇者^{パルス}が出て来るかなんて誰にも解らないのよ？」

「大々丈夫だつて、ちゃんと武器持つてるし。ルネットは心配性だなあ。」

何がうれしかったのか、

ルネットにはサツパリだったが何故か機嫌良くガウロが言った。3

人は今、森に向かう細い街道を歩いている。

「別に心配してないわ。あんたの所為で任務に支障がでたら私が迷惑なだけ。」

サラツと言うルネット。

「はいはい。」

「ちよつと…ちゃんと話聞いてたの？」

呆れ顔になりながら聞く。

「まるで私を隊長だと理解してないみたいな、コイツのこおゆう態度は全然変わらないわね…」

「バツチリ聞いてた〜！…って、おーい！！ディオ太ア何のんびり歩いてんだよ、早く来ないとおいてくぞお〜！」

ディオルは2人の数歩後ろを、何かを抱えながら歩いていた。

「アホかつ！荷物全部オレに持たせやがって！！テメエ等がオレに

合わせる！」「寝坊した奴が文句言わない！今日はあんたが雑用の日でしょ？修業にもなつてちょうどいいじゃない。」

「どんな修業だよっ！？」

「何？あんたまさか、そ・ん・な・荷物が重い訳??」
ルネットはわざとらしく言葉を強調して言った。

「……いいか！お前からゆっくり歩いてるよ！」

「バカだねえ〜アイツ」

くく…と小声で言いながら笑うと、

「どおしよっかなあ〜」

とディオールに聞こえるよう大声でガウロが言った。

…たく、

まだ何か言っているディオールを見た後、前に向き直り考えながら足を速めた。コイツ等は、これで本当に『世界を救う』を目的とした、組織の一部隊なのだと自覚してるのかしら…と。

ディオール達の所属する組織“聖者ジェラント”は、この国では知らぬ者わない程の巨大組織だ。

その中でも上位に属する、組織の主旨とも言える聖者^{セーナ}を探すという任務を担う部隊、ロゲルス隊。それがこの3人の部隊名だった。

…世界は今、“危機”なのだ。幾度となく繰り返された争いに疲れ
たかのように
終わりを迎えようとしている。

世には闇者^{ハルス}と呼ばれる獣に近い闇の力を借りた生きものがはびこり、
街や村を襲い、訳もなく人々を傷つけていた。

聖者は、この世界の唯一の希望の光だ。

闇者とまったく相反する力を神から授かった者。

古の書物によると、聖者は女性だと記されている。

『今だ尚我々人類が生存できるのは、聖者なる者が幾度となく巨大な力を秘めた闇者を葬り、浄化したからに他ならない。』
そして、

『汚れなき真の心を持ち、それ故神に愛され力を授かった女性』
なのだと。…だが
この世は今、憎しみに溢れている。
誰もが誰かを憎み、
笑顔の仮面を張りつけて。
心の底では
憎み合い、
悩み
嘆きながら…生きている。

…そう、私だって…。

「おいルネット、ついたぜ。この森だろ？」
「あつ、え？うん。そお！ここがロナの森よ。」
いつのまにか追い付いたディオールの声に、突然現実に引き戻され驚いた様に体を反応させ答えたルネット。
「…ルネ、ボ…ッとしてると危ない。中で考え事は禁止な？」
「あ、うん…。」
ガウロに真剣な面持ちで言われ、素直に返事をする。
「よし、じゃあ行くわよ。」
その一言を合図に、一行は森の中へと足を踏み入れた。

第三話 ロナの森

第三話

「暗えな。これじゃ昼か夜かの区別もほとんどつかねー。」

一通り辺りを見渡し、大きな木が鬱蒼と生い茂る中。微かな日の光を見つめながらディオルが誰にともなく言う。

「確かにな。しかも以外に深そうな森だぜ。」

2人の言った通り、ロナの森は一行が足を進めれば進めるほど、深くなっていた。木々は太さを増し名も知らぬ草花がそこらじゅうに生えている。

「それにしても嫌な感じね、いかにも何かでますって感じ。」

ガサガサ…

葉の擦れ合う音が妙に耳につく、

そこら中で微かに闇者バルスの気配がする…。

ルネットは神経を尖らせながらボソリと言った。

ガササツツ

葉の音が一層強まった。

3人はピタリとほぼ同時に動きを止める。

「…おいでなさったみたいだね。」

「…そおね。」

静かにそう言いながら、素早く武器をつかむ。ドサツと抱えていた荷物をその場に落とすと

「へっ！！隠れてねえで、とっとと出てきやがれ！」

ディオルが叫んだ、言い終わるや否や木々の間から闇者達が一斉に襲いかかってきた。

闇者のほとんどは、獣のような姿をしている事が多い。だが、闇の力を体に吸収しているからなのか、皆毛並みが黒く、身体能力は遙かに他の動物を越えていた。

飛び出して来たのは猿のような闇者だ、ただ猿よりはいくらか大きく。色もやはり黒かった、そして磨ぎ澄まされた長く鋭い爪は、人を殺すそれだと解る。

…数は、多い。

3人は上手く敵の攻撃をよけ、ディオルは腰にさしてある、刃の赤い剣を抜いた。

顔には不敵な笑みを作り、喜んでいるように見える。

「おらよっ！」

そう言つと、勢いよく目の前にいた闇者の右腕を切り落とした。

『ガアツ…！』

闇者が低い声で唸ると、黒いドロっとした、粘膜のある血が飛び散る。それを避けるよう横に飛び、先程攻撃してきた闇者の頭を素早く切り付ける。こちらも難なくその場に倒れると黒い血を流し、動かなくなつた。

「チツ…、弱えな。」

小さな声で言う。

先程腕を無くした闇者が呻き声をあげつつディオルの背中に近付き、もう片方の腕を思い切り振り下ろすが、まるで背に瞳がついているかのようにディオルは鮮やかにその攻撃をかわし。

「遅えんだよ！ノロマ！」

言うなり剣を真横に滑らせ、首を落とした。

ガウロは背中にかけてあつた輝くような銀の刃の長剣を軽がると使い、目の前にいる闇者を縦に切り付け、続け様後ろを振り向き円を描くように敵の胸を切り離す。

「なんだあゝ？全然強くないぜ？…おわっ！でもバカ力だなあ、コイツ等。」

向かってきた闇者の攻撃を長剣で受けとめ、ガウロが言った。

「ちよつとガウロ！どんな相手でも戦いに集中しなさい！」

敵との間合いを的確に開け、魔法と細身のレイピアを上手く使い分けながらルネットが鋭く言う。

「りよ〜かい」

ガウロの返事が耳に届くとルネットはレイピアで目の前の敵の頭を突く、そして即座に唱え終わった呪文を放った。

「ファイア ストーム！」

小さな炎の渦がいくつか現れる、近くにいた闇者は次々に炎に飲まれ動かなくなった。

「やっぱ便利だよな、魔法って。」

ザシュ！一気に距離を詰め最後の闇者を背中から切ると、ディオルが言った。

「てか、数ばつかでさっぱり強くねえじゃねえか。」

長剣をしまいつつ、ガウロも言う。

「けどその辺の奴らよりわ力あったって〜！俺が思うくらいだし！ディオ太並にバカだったけどなあ。」

「んだと teme エー！」

ルネットも近づいて来て、髪をかきあげながら言った。

「バカなのは解ってるわよ。」

「オイ！！！！」

「単純すぎだし協調性もないしね。」

「アホかああ！！！！」

「……………。闇者の事よ。」

「……………。」

本っ当バカ…

腹を抱え笑っているガウロに肘鉄を食らわせ。

思いつつルネットは言葉を続ける。

「とにかく、町に近い普通の森ならまずここまで数多く闇者がいる事はないわ。強い奴わいないにしてもほっとく訳にいかないし…、もう少し調べてみる必要があるそうね。」

ルネットがまとめて3人分の荷物をディオルに渡す。

「はい！と言うわけで、またよろしくね。」ニッコリと、輝いた顔

で。

「……………」

ディオルは無言でガウロを見た。

彼もまた輝かしい顔をし、親指をグツと上げ

「ガンバツ」

と。いつになく明るく言う。ディオルは殴り倒したい衝動を押さえ、その重々しい荷物を見、肩を震わせると

「……………つざっけんなああああ!!!」

と周りの木々が揺れる程の大声を上げ、何羽かの小鳥たちが羽を休めていたはずの木から離れ、

飛び立っていった。

第四話光る塔

第四話

「おいコラっ！ルネット、本ツ当にこの森に、強い闇者は出てくんだろなあ！？」

一向は更に森の奥に進んでいた。

デイオルはまたも2人の数歩後ろを歩きながら、不満気な声でそう叫ぶ。

「…あんた私の話聞いてたわけ？“いないかも”って言ったでしょ、解らないから調査してるんでしょーが！」

「つてもさつきから会う敵全部雑魚ばっかぢやねーか！」

そうなのだ、先程からとりあえず色々な方角へ進んでいるのだが、森は深まるばかりで

出てくる闇者と言えば、数が多いだけのさっきの闇者。形は違えど何等変わらない者達ばかりだった。

「デイオ太は短気だなあ、そんなんじや俺みたいにもてないよ？」

横からガウロが割り込んでくる。

「別にもてたいなんざ思ってたねえ！テメエが出てくると話がややこしくなんだよ！！！」

「……お前、それで本当に健全な16の男か？」

「アホか、オレが男以外のなんに見えるってんだ！」

「……………ホ

「アホかあツツ！！！！！」

「はいはいはい！解ったから、行くわよ。」

いつの間にかいつももの2人の言い争いが始まり、ルネットは呆れ、時々活を入れた。

その後も3人はいつもどおり順調に、出会った闇者をことごとく倒していく。

そして気付けば、夕刻の時を迎えていた。

「…こんなとこまで来ても普通の闇者しか出てこないなんて、やっぱり噂は噂だったのかしら。」

足をとめ、周りを見渡しながらルネットが言う。

「でももうこの森の中暗いし…、まだ調べるにしても明日にした方がよくない？確かに数だけわ多いしさあ、こんなとこで野宿はキツイっしょ。」

ちらつとルネットを見ると、ガウロも横に並ぶように足を止め、真面目に意見を返す。

「おい！アホか！ありえねえだろが、まだ奥があるってのにこんなトコで引き返すのかよ！」

「デイト太〜；；；」

お前は平気かもだけどなあ、ルネは女の

「いいわ、行きましょ。」

「…子…；。」

「ただ夕日が沈みきつたらすぐ引き返すわよ？夜を越すのは危険すぎるわ。」

「…わあつたよ…ん？」

デイトルは返事をしながらルネットの奥に目をとめた。そこに、本当に微かにだったけど、夕暗の中で光塔のようなものがあつたからだ。

「…おい、あそこに建物ねーか？」

2人はデイトルが見つめる先を見た。

「さあ？…私には見えないけど？」

目を細めたルネットが、呟くように言う。

「デイト太つては本当無駄に視力いいよなあ〜」

「どおゆう意味だよ！！」

「ガウロ！とにかく行ってみましょ。何か見つかるかもしれないわ。」

「え、本気でまだ進のかよ。」
納得しきれない感じでガウロが言うが、それを無視してディオルを先頭にルネットは歩きだした。

「塔があるならどっちにしる調べなきゃならないんだから、うだうだ言わない！」

そう言うと

「解りました。」

と片手をヒラヒラと上げてガウロもディオルの後ろについて歩きだした。

…やっぱりある。

その建物は近づけば近づくほど、はっきりと目で見て取れるほど形づくっていった。

建物は“塔”のような形をしていたが、煉瓦かなにかできているのだろうか、壁の所々に蔦がはっているように見え、

そして頂上付近の屋根は崩れ落ち、建っているのもやっという、もはや“遺跡”に近い状態だった。

…でもなんだ？あの光。

ディオルが気になるのは

塔の崩壊しかけた見た目より

今尚そこら中に潜んでいる闇者より

遠くからでもハッキリ見て取れた、崩れかけた煉瓦の隙間からこぼれる光。

ただ一つだった。

先程までは建物全体をぼやっと包み込むように光っていたのだが、塔との距離を縮めるにつれ一つの部屋らしき所から放たれていることが解る。

「おっ見えてきたきた〜！ボツロイ塔だなあオイ、あれじゃ何にも

ないんじゃないのぉ？」

ガウロは右手を目の上にあて、よくみようと目を細める。

「あの感じからすると本当にかなり古いわね…。こんな森の真ん中に何で建てたのかしら。」

ルネットも考える仕草をしながらブツブツ言っている。

「ルネット、とりあえずあの光つてるところに行ってみよーぜ。ありや絶対何かあるだろ。」

「え？」

「何言つてんだあ〜？デイト太。」

デイオルが意見を言った瞬間、やや下を向いていたルネットはパツと首を上げ、ガウロは右手を下ろし心底不思議そうに真面目な顔で聞いた。

デイオルは2人の方に向き直り呆れ気味に言う。

「何つて…まさかこんな闇者がうろついている森なんかに、住み着いてる奴なんざいねえだろが？」

「だったらあの光は…？」

「ちよつちよつと待つて！…塔に光？」

「そんなん、見えないぜえ〜？」

……………は？

静まりかえった空気、

そして数秒の沈黙が3人を襲う。

「ばっ！アホかテメエ等！！塔見えてんだろ！？だったらあれが見えねえ訳ねえだろが！！！」

取り乱し、慌てながらデイオルが言った。

自分にはハッキリと見えているものが見えないと言っただから…当たり前前と言えはそれまでだが。

けれど2人は言った。サラツと真顔で。

「そんな事言われても、見えないものは見えないわよ。」

「そおだぞ、どんだけ見たって光のカケラもねえってえ。」

「……………マジかよ。」

確かに2人は、ディオルより視力は数段劣る。と言っても凡人並の視力はあるはずだ、

こんな薄暗い森の中で、しかも塔は見えると言っているのに。

光が見えないはずはなかった。

…何なんだよ！

冗談か！？冗談なのか！？いつもみたいにバカにしてやがんのか！？？

イヤ、ガウロはともかくルネットまでこんな場所で言う訳ねえ…。

じゃあどういふ事だ…！！？

ディオルは黙りこみ、その場で普段めつたに使わない頭を使い、グルグル考えだした。が、そこにルネットが言う。

「…ディオルにしか見えないのは本当みたいね。その光のある場所まで案内してちょうだい、私もあんたの言うとおり、そこに何かがあると思うわ。」

「…ああ。」

ディオルは静かに返事をし、軽く頷くと、再び光る塔に向かい歩きだした。

だが、当の本人は、半ば魂ここにあらず状態で、先程よりも早いスピードで足を運んだ。2人も続けて歩く速度を上げる。

塔は見る間に近づいていったが、根強く生えた木々の間を通り抜け、入り口付近に辿り着く頃には、

傾きかけていた夕日はしっかりと沈みきり、辺りには更に深い暗やみが広がっていた。

そんな中、確実に光り輝く場所が一ヶ所、ディオルの瞳には今もしっかりと映りこんでいた。

第四話光る塔（後書き）

こんにちは〜 リナです。ここまで読んでくれてありがとうございます。ご感想は、
ます（、） 艸、（）うれしいかぎりでもやっぱり文を書くのは初め
てなので自信ないんです…。ここで出来れば、感想なんかいただけ
ればうれしいかな〜なんて！物話を読んで自分が感じた事でも何で
もいいです！強制では全然ないんで、気がむいた方はヨロシクお願
いします〜 でわ！

第五話 ヒュート

第五話

“塔”はやはり“遺跡”だった。

大小様々な赤茶色の薄汚れた石がうまくはめ込まれ、森に生えてくる奇怪な植物が間に入り込み根を張っていた。

…この分ではたぶん中にも入り込んでいるのだろつ。そして遺跡の頂上は、とても人が住むには不可能なほどに崩れ落ちていた。

光は、その辺りから漏れている。

「うひゃ〜、すっげえ傾いてるよ。よく保ってるなあ〜。」

ガウロは下から順に上を見、誰にもなく言う。

「やっぱりずいぶん古い建物ね、ひよつとしたら“ヒュート”が作ったものかも。」

もともと半分程開いていた、厚い黒っぽい石で出来た戸を触り、興味深げにルネットが言った。

「ヒュウト？何だそれ？」

ディオルがルネットに問う。…視線は光から外さずに。

「まったくアンタは…」

もつと書物を読みなさい。力だけじゃこの先やってけないわよ？」

「いんだよオレは、ただ闇者ハルスを殺れりゃそれで。」

「……。」

ディオルが切り離れたように言うと、ルネットは一瞬戸惑い押し黙った。

そこへニコニコと、空気を読んでいるのかいないのか、ガウロが言う。

「だよね〜 デイオ太は字、読めないもんな。」

「バカにしてんのかテメエ！読めねえ訳ねえだろが！」

「バカじゃね〜かあ〜。」

「うるさい!“ヒュート”について知りたいんじゃないの!?”
気を取り直しルネットがいつものように鋭く怒鳴る。ヘラヘラ顔の
ガウロに今にも飛び蹴を食らわそうとしていたディオルだったが、
ピタリと動きを止めると。

「…っ、そおだよ!で?結局何なんだ?」

と、不貞腐れ気味に話を戻した。

はあ…。と、ルネットはため息を一つつくと、

並んで立っている2人を交互に見ながら

諦めたように説明をはじめた。

「“ヒュート”っていうのはね、…昔、この星に住んでいた種族の
人々を指す言葉よ。」

そして、私達が生まれる前からここに住み、長きに渡って闇者と戦
ってきた人々のね。」

…今はもう誰も生き残っていないと言われてるけど、その頃造られ
た遺跡なんかもまだ数多く残ってる

今あるその古い書物なんかも、そのヒュートたちが残してくれた物
なのよ。」

「知ってる知ってる、本で読んだことある、聖者^{セーナ}が出てきたおか
げで闇者を全滅できたんだよね。」

ガウロは得意気にそう言ったが、

「…アホか、そんな誰だって知ってるっつーの。じゃなきゃ軍つ
くってまで聖者探しする訳ねえだろが。」

「……………そのとおりよ。」

2人の冷たい視線が痛く突き刺さるだけだった。

「でっでも、何で誰も生き残ってないんだよ?聖者が出てきて闇
者を滅ぼしたなら、今でも普通にヒュートが暮らしてるはずだろ?」

「確かに、それに“ヒュート”っていう種族”って事は、オレ達と
どっか違ってたって事か?」

「だから!書物を読みなさいってば!!!いい?そもそもヒュートっ
ていうのは、今の私達と違って身体的にとっても優れていたの、

皆それぞれ魔法とは違うも一つの特異能力をもっていた…どういうものかは解らないけど、

とにかく！私達とは違う人種なのよ。

そして、滅ぼした闇者が復活する事を知らなかった。闇者は甦るのよ、人の心の中から“憎悪”や“嫌悪”の気持ちが消えないのと同じようにね。“闇”の力も消える事はないんだから。

…そして復活した闇者によって滅ぼされた。平和になったと信じ込んで油断してたのね…きつと、もし生き残ってるヒュートがいたとしても、新しい生命。私達“スコシア”が生まれるまでの何百年もの間生きているとは考えられないわ。」

そこまでをルネットは息つく暇もないほど一気に語り終わると

「他に質問は？」

と、口をポカンと開けている傍から見ればアホ面丸出しの2人に聞いた。

そして2人共、声を出すのを忘れたかのように

ただ黙って首を横に振る。

「そお、じゃあ急いで中を調べましょ。もうとっくに日が落ちてるわよ？早くしないと危険だわ。」

「……………了{解}。」

「……………おう。」

説明しきってスッキリしたのか、『ライト・ニング』という小さな光かりの球をつくる魔法を唱えると、足軽げに進んでいくルネット、その後について行きながら、ボソツとディオルがガウロに呟き程度の声で言った。

「…今の説明、解ったか？」

「いや、さっぱり何がなんだか…。」

「……………。」

日頃闇者と戦う為、体を鍛える事しか考えてない2人には、

…当然のように“読書”なんてゆう単語が当てはまるわけもなく。

……………理解力もなかった。

第六話口ナの遺跡内部（前書き）

はい！私はやっと気付きました！私は…一話一話話の区切りが短すぎる！！という事で、少し長くしてみました（まだまだ）

第六話 ロナの遺跡内部

第六話

塔の中は、想定わしていたがひどく荒れ果てていた。

壁の所々にある不思議な模様はとぎれとぎれで、

天井には至ところで穴や汚れが目立ち、やはり蔭がはびこっている。そして暗く、カビのような臭いが鼻を突いた。

ドアだったと思われる穴が数ヶ所あり、ルネットは念入りにその辺りを調べていた。

「ところで、ディオ太。」

思い出したようにガウロが言った。

「あ？」

ディオルは短く答え、ガウロの方を向く。

ルネットの魔法で多少は見えたが、やはり薄暗い事に変わりはない。つた。

「お前まだ見えんのか？光が。」

「…ああ、さつきよりでかくねえけど、ハッキリな。」

「それはどの部屋あたりなの？」

調べるのをやめ、光をこちらに掲げルネットが言う。

「この部屋じゃあねーよ、もっと上の…。」

『ギヤオオオオオオ！』

「……！！！！」

鋭く大きな叫び声が、ディオルたちの話を遮るようにパラパラと壁の煉瓦を少し落としながら、塔の中にこだました。

「マ〜ジ〜か〜よ〜。」

塔の中でまで闇者がかよお、しかも結構おつきそおな感じだし…。」

ガウロが言った、声はふざけていても顔は真剣そのものだ。

「ディオル！説明はもういいわ！そこまで私達を案内して！」

言いおわるとルネットは、直ぐ様呪文を唱えはじめた。今までの闇者とは違う…そう直感的に感じたのだろう。

「はあ！？案内って、戦いながらどおやってすりゃいいんだよ？」
ディオルも剣の塚に手をかけ、横目でルネットを見ながら体をしっかり闇者が来るだろう方角、入り口とは逆の塔の奥の方に向けて告げた。

「もう…！！本当にアンタは、戦いは私とガウロに任せて、先に行つて！剣で印でも何でも壁につけて進めばいいでしょ！？」

ルネットは呪文を唱え終わり早口で言う、その両手は炎の固まりが燃え盛っているかのように光々と輝いていた。

「チイツ！…わあつたよ！やっとな奴が出てきたってーのに、先頭走んのかよ。」

ついてねーな。ディオルが思った、その時

ガッシャアアン！！

「来たぞ！行け、ディオ太！」

ガウロの言葉を合図に、サツと腰を低くし落ちてくる瓦礫をうまくよけながら剣を抜くと、ドア付近に折り重なっていた邪魔な煉瓦を切り崩す。そしてディオルはその奥へと

「早くこいよ！」

とだけ言い、風のように走りだした。

と、同時にそのやや左上の壁を勢いよく壊し、闇者は姿を表した。先の雑魚と言っていた奴らとは比べものにならない程大きな体は、軽くディオルの背丈を越え、低めの天井ならぶつかっていただろうと思わせる凶太い角が2本頭から生えていた。

体毛は厚く、黒い、顔には血管が浮き出ており
ひどく歪んだ顔をしていた。眼は獲物を捕らえた獣のように赤くキラリと光っている。

「こんなのに大暴れされたら…つとーこのボ口塔じゃあつという間

に崩れるんじゃないの？」

敵が思い切りガウロに向けて腕を振りかざす、がそれを避けて彼は言った。すでに鞘から抜き出した長剣を両手でしっかり持ち構えると、素早くその場から飛び巨大な闇者の懐に飛び込んだ。

『フレア・アロー！』

ガウロが切り込むのと同時に、ルネットの放った

光々と燃えるいくつもの炎の矢が、闇者の顔面に直撃する。煙が上がり、闇者が小さく『グオオ…』

と言ったのが聞こえた。

それを確認すると2人は、目でチラリとお互いに合図し、デイオルが開けたドアへと一気に走りこむ。

奥は、広々とした廊下が

所々に扉や曲がり角をつけつつ、先が見えないほど長く、つづいていた。

「まずいわね…。」

足を止める事なく、ルネットが言った。

「だなく、ありやさすがにちよつとまずいよな。」

先程と同じように、いつもの口調なのだが真剣な面持ちでガウロが言う。

「追い付かれるのも時間の問題…てかあ…。」

何やってんだ？あいつら。

広い廊下を渡りきると、

そこには、石でできた緩やかな螺旋状の階段があった。

「たく…。」

そう言うと、剣を抜き

壁に大きく“ ”と印を付けた。

デイオルらしい印だ。おそらくあの2人なら解るだろう、そう思っ

て。

そして迷わず階段を駆け上がった。

……。

自分でも

不思議だった。光は見えているものの、今や上のほうで、微かに光っているだけだ。

道筋など

もちろんない。

だが、ディオルは迷っていなかった。

『何か』が聞こえたのだ、鈴のなるような、綺麗に響く『声』のような何かが……。

ディオルは一層足を早め

上へ上へと昇っていった。『何か』が

自分を待ってる、

そんな気がしてならなかった。

『デルト・ストーム!』

ルネットが片手を前に突き出しそう叫ぶと、

いくつもの電気でできた球体が闇者を撃った。

「ほっ!!」

ガウロも太い足首を切り付けると、そのまま上へ飛び、闇者のガツチリとした、毛で被われている肩を切る……が、皮膚が驚くほど硬く、何度切り付けても皮一枚程度しか切れなかった。

「くっそお、かったいなあコイツ。」

これで数度目になるこのやり取りに、疲れたようにガウロが言った。「倒せないにしても、とりあえず闇者をまかなきゃ、ディオルに追い付けないわ。」

「あ……。だな、んじゃ頑張って引き離しますかあ!俺とルネのダ

ブル アタックで」

「その攻撃名は絶対にイヤだけど…、そおするしかないわね。」
ゴウツ！ガウロとルネットのちょうど真ん中目がけて、闇者の腕が襲い掛かってきた、2人はそれをかわし、飛び散る石の破片をよけながら、

ルネットは奥に、ガウロは前に出た。

『デスファ・ラング！』

ルネットは、ガウロが持っている長剣に手をかざし言う。

すると、剣がボウ…っとオレンジ色の光をまとった。武器強化の魔法だ。

「よし、ルネ！行くぞ！」

「…うん！！」

バツとガウロは勢い良く飛ぶ。闇者は驚き手を上に振り上げた。

『スプリッド！』

即座に呪文を唱えおわったルネットが、タイミングよく魔法を放つ。刃のような水しぶきが現れ、振り上げられた手を押さえ付ける。

「これで…！少し、おとなしくしてろってえ〜の！」

ザシュツ！！

身動きのとれない闇者の右目に、強化された剣を思い切り突き刺し、振り下ろした。

『グオオツ…！！』

闇者の右目からは、黒い血が滴り落ちる。

目を押さえると、同時に膝をつきつずくまって、動かなくなった。

「ガウロ！今のうち！早く！置いてくわよ！」
ふう〜…。

呼吸を整え、剣を納めつつ振り向くと。

「お〜、つて！」

待てよルネ〜。」

ガウロもルネットを追い掛け、崩れかけた廊下を再び走りはじめた。

…ハア…ハア。

長く続く螺旋階段は、上に進につれ細くなっていた。別れ道があるところには、印を付けて進む。

ディオルは走り続けていたもおすぐだ！

あと、少しで…！

ついに階段は終わりを告げ、最上階まで昇りきった。

目の前に、扉はただ一つ

「ここだッ！！」

バアンと勢いよく扉を開ける。

いったいどのくらいの距離を一気に走ったのだろう、体力だけが取り柄のディオルも、さすがに少しは疲れたらしい。片手でかいた汗を拭き取り辺りを見た。

そこは、

言うなら、何もない部屋だった。

他の部屋へ続くドアもなければ、他の場所のようにはりめぐらされた蔦もなかった。

石の壁に囲まれ

ただ、優しい華のような香が妙に鼻をくすぐった。

上を見上げると、天井に近い壁には小さな穴が開いていて

光は

そこから漏れる。

「…一人じゃ昇れねえじゃねえか。」

ディオルが壁の前まで来て呟いた、その時。

「俺が吹っ飛ばしてやってもいいぜ」

「っ！？ガウロ！」

突然背後から、聞き慣れた陽気な声が掛かり、ディオルは驚いて振

り返った。

先程ディオルが入ってきた入り口に2人は並んで立っている。ただ、ルネットはひどく疲れた様子だと

荒い呼吸と上下する肩で見て取れた。

「てめえ等、ずいぶん遅えじゃねーか。」

「バカ！言わないで、それでも、魔法で……すっ飛んできたんだから。」

ルネットが息も切れ切れに答える、空飛ぶ魔法を使ったんだな。とディオルは思った。

魔法とは、きつと誰もが知っている事だが、使う人物が持つ魔力を消費して初めてその力を発揮させる事ができる。結果、魔力を持つため者も同じ効果を得るには、魔力を持つ者は倍力を消費し持たぬ者に使わなければならない。

……この場合、ガウロは“魔力を持たぬ者”に当てはまった。

「……で？光の原因は、あの穴の中にあるのね？」
息を整えながら、ルネットはディオルの近くまで来て聞く。

「ああ、……あの奥だ。」

ディオルは何故か高鳴る鼓動を押さえるように、わざと低い声で答えた。

「じゃあちゃつちやと行ってこい！闇者が追いつく前にここ出ないと、さすがにまずいぜえ〜。」

ほらっ行くぞ」

「はあ！？おいつ！ちよツツ！！」

いつの間にならなくなったのか、ディオルの両脇をガツシリと掴み、上に持ち上げると抗議の声も聞かずに、ガウロは力のかぎり文字通り、吹っ飛ばした。

「アホかてめえわあああああ……！！！！」

「穴んは自分でなんとか入れよお〜！ガンバツ」

ニコニコと飛んでいくディオルに手を振っているガウロの横で、

「……………はあ。」

ひっそりとため息をつくルネットだった。

するとガウロは勢い良くこちらを向き、

「さっ！ルネは休憩休憩！俺の分まで力使って頑張ってくれたもんなら。」

見張りやってるから、今の内に休んどけよお。」

とニッコリ笑って言った。

「えっ？…あ、ありがと…。」

意外な言葉に焦り、慌ててそう答えると

ガウロはまたも何故か上機嫌に、入り口の方へスキップして行く。

「……？何なの？…いたい…。」

そしてルネットは不思議そうにボソリとそう言つと、少しだけ

ガウロに感謝して

冷たい壁に背を預け、その場にストンと腰を下ろした。

第六話口ナの遺跡内部（後書き）

ついに次回！あらすじに書いてある少女ミフィア登場です どんな
子なのかは読んでからのお・た・の・し・み です〜！！

第七話華の中の少女（前書き）

ついに〜！ヒロイン登場 と言ってもまだあんまり話ません・今回の話、≫≫の中は略なんですけど、カタカナなので読みにくかったですらゴメンナサイ

第七話華の中の少女

第七話

「…何だ？ここ。」

少年は辺りを見渡すと

灰褐色の瞳をいっぱい広げ、間の抜けた声でそう言った。
吹っ飛ばされた後

ディオルは思っていたより小さかった穴に、とっさに自らの剣を刺し奥に煉瓦が倒れるよう周りに切り込みを入れ、

間一髪のところまで手を掛けると、なんとか中に入り込んだのだった。
「どうなってるんだ…？」

もう一度、周りを見回す。これが…光の原因？

部屋の、いたるところには壁の石が何色なのかも解らないほどに細かい金色の糸のような物がはりめぐらされていた。

気付かずに歩けばすぐに足を取られてしまいそで、ディオルは慎重に歩きながら近付き、壁を触る。

過細い金糸はキラリと輝きながら、柔らかく揺れた。

…何でこんなモンの光が、オレにだけ見えただんだ？

壁を伝いゆつくり歩いていると、壁がないのか穴なのか、スイッと金糸が揺れ中に腕が入る。

まだ奥に部屋があるらしい。

ディオルは少し屈みながら指で揺れる糸を掻き分け奥へと入り込む。

「……は。」

瞬間、言葉を失った。

部屋はやはり金の糸に囲まれ光輝き、屋根は崩れ落ちていて、ほとんどないに等しかった

その隙間から……まるで差し込む月明かりを浴びているかのように

例えるなら

まるで

輝く華の

蕾のような

金糸の塊があった

……ドキン

まただ、鼓動が早くなる。オレを呼んでた

『何か』がそこにある。

ディオルは、本能的にだろつか、何故かそう思った。

一歩

また一歩

『それ』に近づいていく
鼓動は、まだ鳴りやまない
それどころか
より一層
強くなる。

金糸に手を掛ける
警戒心はなかった、まるでこれが
危険なものではないと、知っているかのように。
触れると金糸は

シャラン

と音を奏で
溶けるように消えた
そして

中から

現われたのは

「……………女……………」

青紫の

見たことのない髪色をした少女だった。ディオルは少女を黙って見下ろすように覗き込む。

……。

長いまつ毛を伏せ、眠っている少女。

体は細く、色は白い。

だが先程から香っているこの甘い香は確かに彼女から発していた

……… 死んでる……よな？

ディオルは、確かめるようにそっと少女に手を伸ばす。

……あつ……

「あつたけえ……。」

触れた頬から伝わる温もりは、確かに少女が生きている証だった。

……でも

「何でこんなトコに……。」

「……………ネ……？」

「ツツ……!!」

少女の口が微かに動いた。ディオルは頬から手を物凄い勢いで放す視線は少女に向けたままで。

少女は、

ゆっくりと

瞳をあける。

吸い込まれそうな程深い紫の瞳が、緩やかにディオルをとらえた。

「……。」

ディオルはまるで声を失ってしまったように、身動き一つせず、ただ黙って

少女との視線を外せずにいた。

「……？」

ムクリと金系の中から起き上がる、

少女は

とても薄そうな生地で出来た、レースがいたるところに付けられている細かい刺繍がいくつも描かれた、膝丈のドレスのような服に身を包まれていた。長くのびた髪が

サラリと揺れる

そして不思議そうな顔をして再びディオルを見つめた。

「ディオ太……！何かあったかあ！？何でもいいからとりあえず持つて来いってえ……！」

「……っ！」

遠くから、ガウロの無駄に大きな叫び声が聞こえ、ハツとして我に返った。

「……っ……っか、“何か”ならあったけどよ……」

唸るように下を向くと

チラツと再度少女を見る。少女は、あいかわらずただポーっとディオールを見つめているだけだった。

「てか、よ。お前名前は？ここ住んでる…わけねえよなあ。」

「……？」

少女は何も言わない、ただ不思議そうに首を傾げるだけだ。

ディオールは何を言ったらいいのかサツパリ解らず混乱し、

「あ………」

とまた唸る。

「おい！！早くしろってえゝの！もお闇者が来ちまうぞ！」

「っ！…わあつたよ！！おいお前！とりあえずこつから出るぞ！」

ガバツと立ち上がり、彼女を無理矢理ひっぱり上げる。膝丈のドレスについたレースがふわりと広がる。

「…！？」

が、少女はふらつき

ディオールの方に倒れこむ。

「ちっ！しょうがねえな。」

グイッ！軽がると、けれど乱暴に抱え、ディオールは入ってきた穴に向かい走りだす。

やはり少女は軽かった。

「しっかり掴まってるよ！」

言うなり、走ったまま思い切り勢いをつけ穴から飛び降りた。ふわっと腰の下まである少女の長い髪が宙に浮く。

「キヤ…ア…！」

ディオールにとってはたいした事ない高さだが、少女は違ったのだから。

叫び声が微かに聞こえたが、スピードを落とせる訳もなく、逆にそのまま速度を上げ落ちていく。

ディオールは、上手く空中で態勢を返ると、そのままトツツと着地した。

「ふう…。」

息をつき、前を見る。

すぐ目の前に2人はいた。…が、どちらもちらを向いていない。何か…おそらく先の闇者が近づいてくる気配を感じ階段があるその方向を見つめていた。

「おっせよディオ太、闇者到着寸前だぜ？」

「…っせーな、色々あったんだよ。っーか闇者倒したんじゃないのかよ？」

こちらを見ずに話し掛けてきたガウロに、ディオルは最初言葉を濁らせながら答える。

「倒すなんて出来っこないわよ、レベル5はあるわよ？あの闇者は…無傷なだけでも十分ありがたいわ。」

「へーっ、こんな遺跡にレベル5ねえ。…はっ!?!? レベル5!?!?」

闇者はある程度強くなると、レベルで判断される。

レベルは10からあり、数が減るにつれて強さを増していくのだ。レベル5の闇者は今のディオル達3人が、万全の調子で戦ったとしても。

適うかどうかのレベルだ。

「だからそう言って…ちよっ!!ディオル!何よその子!?!」

ディオルの方に振り向いた瞬間、ルネットはギョツとしたような顔をして大声を上げた。

少女は今だディオルの腕の中でジツとしている。

「ルネ、今はとにかくどおやってアイツから逃げるか考えよう…っで、あらく来ちゃったよ。」

『グオオオオオツツ!?!』

ガシャーン!!

荒々しくドアを破壊し、怒り狂ったようなようすの闇者が姿を現した、

右目の血はすでに止まっているらしく黒い痂らしきものができているだけだった。

反対側も潰しとけばよかった…。

心の中で一人今更後悔するガウロ。

「おいッ！ムチャクチャ怒ってんぞ！！マジで逃げ切れんのかよ！？」

ディオルは改めてその闇者を見ると、焦ったようにそう叫んだ。

こちらには、戦い慣れなどまるでしていなそうな少女がいるのだ。

「…まあ、見つかったからにはやるしかないっしょ。」

ガウロは答えながら長剣をゆっくり手に掴み、構える。

「いくわよ。」

ルネットが静かに言い、それぞれが行動を開始しようとした

その時。

「…バイグトウ！！」

《…ヤメテ！！》

闇者の動きが止まり

聞いたことのない声が部屋全体に響いた、

聞いたことのない

言葉で。

「…あ？」

ディオルは少女を見た。

今の

コイツが？

…フワン…

まるで重力など感じていないみたいに、少女はディオルの腕から飛び降りた。

その瞳は、闇者をまっすぐ見つめている。

「お…前？」

ディオルは低い小さな声で言う。

「てか…！誰？その子！」

今初めて少女に気付いたらしいガウロが驚いたように声を上げた。
3人が見つめる中、少女は前方にいるルネットとガウロの間をゆっ
くりと抜け

闇者の前に立つ。

「ちよつと！危ないわよ！？」

ルネットは叫ぶが、聞こえているのかいないのか。

少女に動く気配はなかった。

そして、静かに。

「バグイ、ンベカルオシババンク…ジヨヌイバンテイイシトナ…テ
イマナゾルルオプツジオテイダケイシル…バイグトウ…。」

《ダメ、オネガイダカラ…タタカワナイデ…ワルギガアツタワケジ
ヤナイノ…ヤメテ…》

と、宥めるように言った。

鈴が鳴るような

綺麗な声で。

「グオオ…」

怒りに満ちていた闇者の顔が徐々に解れる。

「バイグトウ、ナハライシトナ。」

《ヤメテ、タタカワナイデ》

今度ははつきりとした、だが優しげな声色で言う。

3人は、茫然とそこに立ち尽くし

ただ黙って少女を見つめていた。

闇者からはすでに殺気はなく、大きな黒い体をドスンと音を
たてながら向きをかえ、闇のなかへ引き返していった。

「…」

沈黙が流れる中、

今だ闇者が消えた方を見つめている少女から

3人は誰一人目を離すことが出来なかった

だが、誰一人口を開くことも出来なかった。

少女は気付いたようにクルンとこちらを振り返ると、そのパツチリとした大きな瞳で3人を順番に見つめ。

「レッツワァ… テイグイヌクトウ。ミフィアトナナルー！」

《エットオ… ハジメマシテ。ミフィアデス！》

ディオル達がサツパリ理解できない言葉を告げ終えると少女は、ニツコリと微笑んだ。

第八話 ミファイア

第八話

「早く早く！だいぶ時間をロスしたわ、急いでアステイカに戻りましょー！」

ルネットがせかせかと2人の前を小走りに走りながら言う。

現在地は今だにロナの森の奥深く、星どころか月もとつくに姿を表し森の不穏的な空気を一層強めていた

…のだが

「ルネ〜！自分だけ身軽だからって先行くな〜。」

遺跡につくまでディオルが持っていた3人分の荷物を持ち、ルネットに文句を言いながらもまったく苦になっていない軽がるしい足取りで追い掛けているガウロと。

そしてやはり取り残された残りの1人が、ブスツとした不機嫌オーラ全開の顔をし

名前も解らない1人の少女を背負いながら。

「テムエ等ざっけんなよ！！何でオレがよりによってこんなハルス闇者

モドキ”おぶんなきやなんねーんだよ！！”

と糸を切ったように叫びちらしていたため、その空気はだいぶ薄れていた。

足を止めバツと勢い良くルネットが振り向く。

「その子を手連れてきたのは誰よ？」

「なっそ、れわ…。」

口籠もるディオル。

「ディオ太〜」

すかさず陽気にガウロが言った。

「うっせえ！言わなくても解ってただよ！」

「よって倒れたその子を手運ぶ義務はディオル。あんたにあんのよ！」

それだけ言うと前に向き直り今度は小走りではなく本気で走りだした。

ガウロもそれに続いて

「荷物持ってやってんだから早く来いよ。」
と言いながら後を追う。

「……………くっそお。」

少女は、3人に何かを言い微笑んだ直後倒れた。

突然に、何の前触れもなく。それから瞳をしっかりと閉じ安らかな寝息を立てている。

重さはちつとも気にはならなかったが、ディオルは少女に触れるのが嫌だった。

…憎い闇者、その闇者と話す不思議な言葉を使う少女…。

「あいつらの仲間なんじゃねえのか？」
ポソリと怪訝そうな声で呟く。

はじめはアステイカへ連れていく事さえ反対した、だがルネットが絶対に連れていくと言い張り譲らず、
そのため渋々少女を連れ遺跡を出たのだが…。

…自分で背負えってんだ。

そう心の中で毒づきながらも、その手はしっかりと少女の体を支えているのだと思うとディオルは益々嫌気がさす。ディオルは横目で自分の肩にもたれかかっている少女を見る。

月に照らされた輝くような白肌

暗闇の中でも生える青紫の滑るような長い髪

少女はただ一言美しかった。

「夜なのに昼間より闇者が出なかったわね。」

アステイカの宿屋に到着し、少女をベットに寝かせた後ルネットが唐突に言う。

「あゝ、そいやそだなあ、ロナの森の闇者は夜寝るんじゃないの？」

床に座りコーヒーを飲みながらガウロが答える。

正直ガウロと苦いコーヒーはあまりに不釣り合いだなと思いながらルネットは話続けた。

「バカ！普通に考えておかしいと思わないの！？」

闇の力をかりてる生きものが一番活動しやすいはずの夜に寝るわけないじゃない！」

「それもそおだなあゝ。」

「……はあ。バカ。」

「何？バカバカって、意地悪すんのは好きな人って証拠だけ？ルネ。」

「意地悪じゃなくて呆れてんのよ！！」

「へゝ」

「ちよつと、聞いているの！？」

「聞いているってゝ。」

「……もう！」

これ以上の会話は無理と判断したのか、ルネットは窓の側に立ち

腕を組み眉にしわを寄せて未だ不機嫌そうなディオルの方へ顔を向ける。

「ディオルも…、いい加減機嫌治しなさいよ。」

額に手をあてながら言った。

「オレは絶対認めねえ！」

弾かれたようにディオルが叫ぶ。

「ディオ太く、もう決定したんだって！」

「何でこんな奴の面倒見なきゃなんねーんだ！こんな闇者と話すよ
うな奴！！」

「あれは“ヒュアリー語”よ。」

ディオルの機嫌は森を抜けてからも良くなるどころか悪くなる一方
だ。

その最大の理由は、先程彼が言ったように

ルネットの独断で正体不明の少女を保護する決定をした事だ、理由
を聞いても『放っておく訳にもいかないし、気になる節がある』と
はつきり告げる事はなく、納得いかないディオルに慣れたようにサ
ラツとした態度でルネットが答え。彼女もコーヒーをカップに入れ
一口それを飲んだ。

「…ヒュアリー語って…。」

「ヒュートが使う言葉よ。ディオル、一体あの子あそこで何してた
の？」

「何って言われても、」

チラツと身動き一つせず、すやすやと眠っている少女を見るその目
付きは

まるで闇者を見ているように鋭く、憎しみさえ感じとれるとルネッ
トは思った。ディオルは顔をルネットに戻し言う。

「寝てたんだよ、変な光った糸みたいのに包まれて。」

「寝てたあ？あんなトコで？」

ガウロが間抜けな声を上げる。確かに遺跡は人がとても住める状態
ではなかったし、周りに闇者がウヨウヨしてる中

寝てたと言うのだから、驚くのも無理はない。

「そおだよ。」

「どおして光があんたにだけ見えたのかは、」

「んなの解る訳ねえだろ！とにかくオレは絶対反対だかなー！！」

ディオルが言い切ると、ガウロとルネットは数秒間

目で合図をしてるかのように見つめ合い。

「この子に直接聞いてみるしかないわね。」

「ディオ太役たたないからね。」

そう言つて残りのコーヒを2人揃つて飲み干した。

「おいコラッ！ テメエ等オレの話し聞いてたのかよ！」

「聞いてたわよ。無視しただけ。」

「尚悪いんだよッ！！」

「ほら、用が済んだらさっさと部屋戻るぞ。役たたず。」

「ブツ殺すぞ！！？」と言つても力でガウロに適うわけもなく

ディオルは首をガツシリ片手で抱えられながらズルズル部屋から引きずり出される。

「それにしても本当に何でお前しか見えなかつたんだろなあ？」

廊下を歩きながら心底不思議そうにガウロが問う。

「…オレが聞きてーよ、そんな事。」

ボソツと言つたディオルの答えをガウロは何故か聞こえないふりをしてそのまま部屋に戻つていった。

外は暗く

部屋の中も微かな月明かりがなければ真っ暗な状態だった。そんな中部屋に入り明かりも灯さず壁を背もたれに床に座る。

ディオルは腰から剣を外し隣に置いた。

そうだ、

確かにオレは光が見えたとし声が聞こえた

最後には消えそうな位小さな光と

何て言つてたのかもサツパリな声が…けど

「アイツが、オレを呼んだのか？」

一人小声でそう言つた。

何の為に

何の目的で？ 考えるなんて自分らしくないと解つていても

留まる事なく疑問は次から次へと溢れるように浮き出てくる。だが結局の所、ルネットの言うように少女に直接聞かなくてはきつと解らないままなのだろう。思い巡らせていると

足元に光が射した。

気付けば、日が昇りはじめている。

「もう朝か…。」

今日は遅れる訳にいかねーな。

鬼隊長発案恐怖の特別メニューをやらされてはたまらない。ディオールが顔を洗い再び剣を腰にさした

瞬間

「ガウロー！ディオールー！！部屋に来てー！！」

ルネットの物凄い大声がディオールの耳を貫く、何事かと思い木で出来たドアを勢い良く開け猛ダッシュでルネットの部屋へ走る。入ると、すでにガウロが立っていた。

「どおしたんだよ!？」

ディオールが問う。

「この子…!」

ルネットが何か言いかけた、ディオールの目がルネットの奥の青紫の影を捕らえる。

「…!」

少女は目覚めていた、ニコニコと笑いながらベットに座り、足をブラブラ動かしている。

「起きたんだね、よかったよかった。」

ガウロが笑顔で言った。

「うん…、目を覚ましたのは大分前なのよ。でも」

「でも、何だよ?」

ディオールが聞く。

「この子ディオールより頭いいかも…。」

「デメエツ！！どーゆう理屈だそりゃあ！！！」

右足を前に踏み込み、ルネットの発言にすかさずつつこむディオル。
「テイグイヌクトウ！ミフィアな！よろしくー！」

《ハジメマシテ！》

「は…？」

「あゝ、なるほどねえ。」

突然少女が立ち上がり口を開いた、ディオルは動きをピタリと止め少女を凝視する。ものすごく珍しいものを見るような顔つきをして。
「ンテイ…おはようね。」

《オハ…》

ルネットから教えられたのか、たどたどしい言葉遣いで言うと、ペコリと一礼した。

「おはよ〜。」

ガウロが返事をする中、ルネットも立ち上がって説明しだした。

「凄く吸収力があるのよ、身振り手振りすれば何となくこちらの言ってる事を理解できるみたいだし、ちゃんと教えさえすればきっとしっかり話せるようになると思うわ。」

「イヌレ、な、まえ？ミフィアな〜！」

《ナマエ》

自らを指差しピョンピョンと跳ねながら言う。跳ねる度に薄い綺麗なドレスがフワフワと浮かびあがり、まるで店に売ってる高級人形のようなだった。

「ミフィアってゆ〜の？俺はガウロ。よろしく〜。」

ミフィアに近付きにこやかに言うガウロ、相変わらず子供に話し掛けるような口振りで言う。

「ガ、ウロ？ガウロな！」

「そおそお〜。」

「あ、私もまだ名乗ってなかったわね。ルネットよ。」
ルネットも自分の顔を差しながら言った。

「ル…？」

「ルネだよ、この人はルネ。んでこつちのガキんちよは〜ディオ太
」
ガウロはすかさず一人一人を指差して教える、

「ちよつと！変な風に教えないでよ！！覚えちゃうでしょ！」

「オレはガキじゃねえツツ！！！」

2人がガウロに抗議するがされた本人は特に気にした様子もなくむ
しろ楽しんでる様子で

「覚えて〜？」

と笑顔で聞く。

「…??ル、ネ？」

「違う！違うのよ、私はルネット！ほら、あんたも自分の名前くら
い自分でいいなさい！」

ルネットが慌てて訂正しながら軽くディオールのおでこを叩く。ディ
オールはそこをさすると面倒くささそうに言った。

「…ディオール、だ。」

ミフィアはしばらくキョトンとした顔をしたがやがてニコツと笑う
と、

「ルネット！ルネ〜！ディール！ディオオ！」

言いながら、ガウロと同じように2人を指差した。

「…なんか、微妙に違うわね。」

「コイツ、バカにしてんじゃねえのか？」

それぞれ微妙な表情で感想を述べる。

「ガウロ、ルネ…ツト、ディオオ？」

確認するようにもう一度名前を言う。

「だからオレの名前違うっつーの！」

「ミフィシイ、ジョナルーダトウコウカ、プルールオ！」

《ミフィヨ、タスケテクレテ、アリガトウゴザイマス！》

ディオールの指摘をあつさり無視した、と言うより何と言ったのか解
ならかつたのだろうが、ミフィアはトトト…。と3人の向かいに立
つように移動すると笑顔で言った。

1人満面の笑顔で。

「……」

3人はその場に固まったように黙り込み返事のしようのない沈黙が辺りを包む、窓の外で鳴く鳥の囀りがこれでもかというくらい響き渡り

そして頭から“？”マークをだし不思議そうな顔に変わったミフィアを数秒間見た後、やっと口を開いたのだった。

「……なあ？」

「何よ、ガウロ……」

「……今ミフィア何て言ったんだ？」

「……解る訳ないでしょ！」「……向こうの言ってる事解らないでどおやって言葉教えんだよ。」

「うっさいわね！何とかなるわよ！何とか……！」

開き治ったようにルネットは大声で言うと、笑顔の上に冷や汗を浮かべ、

そそくさと荷物を持ち上げる、

「さあ今日も長い一日の始まりよ！早くこの宿出て次の町に行かないか！任務任務！」

と言ってミフィアの手を引き部屋から出ていった。

残された2人は互いを見ると

「あれで……何とかなるかあ？」

「……オレは反対したからな。」

言いおわるや否やのろのろと自室に荷物をとりに戻るのだった。

今日と言う日は

まだ始まったばかり

だが、これからの

長い日々の幕開けにすぎなかった事を、まだ

誰も知らない朝だった。

第八話 ミファイア（後書き）

今まで忙しく、更新がとても遅れてしまいました。これからはまた
ちよくちよく更新できるはずなんで 頑張って書きます

第九話 ダジストにて（前書き）

第八話の題名を間違えてしまいました（；。　。　；）誤解した方が
いたらすいません…（＞　＜…）

第九話 ダジストにて

第九話一

果たして

「〜ガツウロ、ルネエ　　ディオ〜オオ　」

それを歌と言っているのかどうか、

解らないほど微妙な音程とリズムを刻み、しかし少女ミフィアは楽しげに覚えたての言葉を並べてフワフワの膝丈ドレスの上からすっぽりとコートを羽織りニコやかに歩いていた。宿屋で代金を払い終えるとルネットの指示の元

いつものメンバー3人と新たに加わった少女1人は次の町ダジストへのそう遠くない道程をひたすら歩く。天気は良好

気温も暖かく

晴れ渡った青空に

咲き誇る花々や青い葉が感謝しているようだった。

そんな中

「〜だああ！うつせえ！少しは黙れ、この闇者モドキ！」
ハルス

耐えかねたようにディオルが声を上げる。

が、ミフィアは一体どうとらえたのか

「ルゾル、ツソーヨコウグ！」

《ツギハ、ニキヨクメデス！》

ニコツと笑い返した歌いだした。

「…いい度胸じゃねえかテメエ…！このオレに喧嘩うるつもりか？

…あ、痛ッ！！！？」

口元を引きつらせさらに大声を上げたディオルの後頭部を

ドガンッ

と、どう考えてもこの青空の下には似付かわしくない鈍器で殴りつけたような鈍い音がした。

さわやかな笑顔で全員分の大荷物を持ったガウロが後ろからひよっこり顔をだす。

どおやら今日は彼が雑用係の日らしい。

「まあまあディオ太 ミフィアも悪気はないんだからそんな怒んなつて〜。」

「あつてたまるか!…そおだな、今のお前への怒りに比べればコイツに対する怒りなんて確かにちつちえもんかもなあつ…!」

「心は常に広く保たなきゃね〜 暴力反対。」

「人思つきり殴つてい言う台詞かよ!」

「イヤ、ごめんごめん。ディオ太相手だどつい力入っちゃつて〜。」

「アホかあああ! “つい” じゃねえ! 殺す気かよテメエ!!!」

ガウロに飛び掛かろうとディオオルが地を蹴った瞬間、男2人は避ける間もないくらい素早く強烈なルネットのグーパンチを思い切り頬にくらい

「ぐはっ!」

と声を漏らしつつその場に無残にも

仲良く同時に倒れこんだ。

ミフィアはドサツという音に気付き立ち止まって後ろを振り向く。

「はい! バカ2人はどいたどいた! こんな道端で喧嘩して無駄に体力使わないでよ? ダジストに行ったら闇者退治の仕事がまつてるんだから。」

ルネットが何事もなかったように手をはたきながらスタスタとミフィアの前まで歩いていくと、少女はクルリとした愛くるしい深紫の目を合わせるよう首を傾げながら

「ゴクジヨル? シイバンナルーシヨ?」

《ドウシタンデスカ? オナカスイタノデスカ?》

とルネットに尋ねたので

ルネットはとりあえず笑顔をミフィアに向けた。

「……だから何でテメエはいつも勝手に決めんだ! 聖者探しはどお

したんだよ!」

ジンジン熱い頬を押さえ起き上がったディオルが言う。

「まだ金残ってるだろ? また俺バイトすんのあ?」

ガウロも起き上がりながら言った、実に嫌そうに。

彼らの旅は僅かに配られる軍事資金と、その力を活かした闇者退治などの仕事で賄われていた。

いくら誰もが知っている巨大組織とはいえ、

闇者が増加し目に見て取れる程衰弱した世界危機の影響を受けない訳はなく

その巨大さ故一部隊に配られる金額には限度があった。ディオルたちの隊がいくら上位にあつたとて、たった3人ではやはり一カ月の宿代がいいところだ。

それ以外にかかる食費武具防具などの代金はすべて自分達で負担していた。

そんな訳で旅をし始めてからというものの3人は闇者退治やらお尋ね者退治をこなし旅の資金を稼ぎながら今までの日々を送っていたのだった。

「もちろん聖者探しはするわよ、でもその前にこの子の服なんかを揃えてあげなきゃ。さすがにこの服装じゃ目立ちすぎるわ。」

そう言つて動き回つたため少しはだけたミフィアのコートをしっかりと着せなおす。

「それと今回は報酬がけつこう高値だったからバイトはしなくつていいわよ。」

「よっしゃ〜!」

「そんなうれしいかよ?」

両手を上げ大喜びのガウロにディオルが不思議がつて尋ねる。

「ディオ太クンじゃあとてもできない重労働と複雑な人間関係があるんだよ。」地面に落ちた荷物を持ち上げると、いつものような小馬鹿にした言い方でガウロが答えた。

「ガキ扱いすんな! オレだつてなあ、やろつと思えばできんだよ!

！
「デイオルは一度もガウロのように単独で仕事をした事がなかった。他人と一緒に働くなどやりたいと思った事もなかったが、今は意地の方が先立つ。」

「あんたは無理よ。協調性が欠片もないしすぐキレルし。」

「バカだからね。」

「バカ、ね。」

「……………」

ルネット、ガウロ、仕舞いにはミフィアにまでダメだしされ、すっかり不貞腐れたデイオルはその後クルクル歌いながら踊り回るミフィアにキレル事もなく、ひたすら先へ先へと進んでいった。

そのおかげと言っては何だが、ルネットが予定していたよりも数時間早く

日が真上に昇る頃にはダジストに到着することができた。

ダジストはお世辞にも活気に満ちた町とは言えず、

高値で闇者退治を依頼するだけの事はあって至る所に闇者が付けたらしい傷跡が目立ち、修復が間に合わないのかもはやそれすら放棄したのか、町並みは荒れて重苦しい空気が人々を包んでいた。

「ヨネヌイテイワヨネ？」《ココハドコデスカ？》

途中ルネットに被らされたフードを邪魔そうに指でいじりながらミフィアが言った。

「ミフィア、ここからはヒュアリー語は禁止よ。ダメ、解った？」ルネットはミフィアに見えるように口の前でバツ印をつくりゆつくりと話す。

それをなんとなく理解したのか、ミフィアはコクンと頷くとフードを深く被りなおした。

「おい、早く入ろうぜ、腹へった。」

ディオールが腹部を押さえながら言つと

「オレも、まずは飯食おうよ。」

ガウロも同意した。

こんな時ばかり意気投合するんだから…。

ルネットは思いながら周りを見渡した。

「仕方ないわね、邪魔な荷物も置いときたいしその宿屋に行きましょ。ご飯はそれから。」

指差したのは町の入り口に一番近くにあつたにもかかわらず

周りは木に覆われ古ぼけた傷がいくつもあつた

つぎはぎだらけな赤や黄色が入り交じつたおかしな壁色でできた、いかにも何かでそうな所だつた。ディオールとガウロは思わずゴクリと息をのむ。

隣でミフィアが興味深げに建物を見つめていた。

「…ルネット、時々男より度胸あるよね。」

「どういう意味？」

ニッコリ恐い笑みを浮かべボキツと指を鳴らす。

「どこ行つたつてきつと似たようなものよ、いいわよね？ここで。」

嫌とは言わせない空気が2人をとらえた。

「…モチロン、オツケーデス。」

「…ココデ、イイデス。」

「いいで、すう〜！」

先の2人と比較すると場違いなほど明るいミフィアの返事にルネットは調子が狂つたのか、

「行くわよ。」

とだけ言い宿屋の扉をあけた。

「なんつでこつなるんだよ〜！」

部屋の中にディオールの声がこだまする。

宿屋の一室には、ルネットとガウロの姿はなく、鏡の前で櫛やはさ

みを持って遊ぶミアと部屋の真ん中に立ち尽くしたディオルの2人きりだった。

時は少しさかのぼって数分前

中は思っていたよりひどい造りではなかったが、やはりつきはぎだらけで不気味な事に変わりわなく。

部屋をいつもどおり3つとり、各々の部屋に荷物を置くとルネットの部屋へ集まった。

集まるなり。「じゃあ私はひとまずミアの服を先に買って来るわね。少しだけ待ってて。」

そう言つてさつさと財布を持ち消えるルネット。その姿を見送つた直後、

「んじゃその間に剣を磨いとくかあ、昨日の闇者の所為で刃がボロボロだったし……。」

「おいっ！コイツは誰が見てるんだよ！」立ち上がったガウロを引き止めディオルが言った。

コイツとは勿論ミアの事だ、当のミアはコートを脱ぎすけると物珍しげに色々な物を物色していた。

「そりゃディオ太がみてるしかないっしょ、俺は刃物出すから危険だし。」

しれっと当然のように答える。

「ッざっけんな！オレがこんな奴見る訳ねえだろが！」声を荒げて言い返すが

時すでに遅し。

ガウロは手を振り

「よろしく」

と言いながらボタンとドアの向こうへ消えていったのだった。

そして現在にいたる。

「……くそっ！」諦めたのか、ディオルはドカツと音をたててその

場にあぐらをかき座り込んだ。チツチツチ…

部屋にもともと設置されていた時計の音がやけに響いて聞こえる。

いや、そう聞こえたのはたぶんディオルだけだろう。ミフィアは今だ鏡の前で

「ヨネカ…ヨネゴ??」

《コレワ…コウ??》

と一人呟きながら手に持った櫛の先っぽをペシペシ頭にあてていた。旗から見ればおかしな光景である。

「おい…。」

うるさいぞ。と意味を込め低めのトーンでディオルが言う。

チツチツチ…

だがミフィアに伝わる訳もなく、さらにペシンと櫛をおでこにあて今度ははさみにその意識を移し、シャキンシャキンと音をたてただした。

トントんとイライラしながらも膝を人差し指で叩くディオル。

「…おいっ!」

先より少し大きめに声をあげた

が、ミフィアは気付かず尚もシャキンシャキンと音をたてる。

チツチツチ…

トントン

シャキンシャキン

チツチツチ…

トントントン

シャキンシャキンシャキン

「だああ!うるせえってんだよ!!黙れ!」

ついに痺れを切らしたディオルがミフィアの方に振り向きざま怒鳴った

瞬間。

ジャキンッ！

「……………」

はさみが

確かに何かを勢い良く切り落としたような音がした。

「…は、まさか。」

ディオルが小さく言うのと、肩をすくめ“やっちゃった”と言わんばかりの際どい笑顔を顔いっぱいに広げて。

「ディオオ、ワゴクヨ……………」

《ドウシマシヨウ…………》と、ミフィアが弱々しく言いながら振り向いた。

手元をみると少女の手には滑るような青紫の髪がしっかりと握られていた。

「アツアホかあああああ！！！！！」

今日一番の大きな声をあげ、ディオルは生まれて初めて“早く2人よ戻って来い”と、

切に願うのだった。

第十話髪と空腹

第十話

ハラリ

数本の髪が床に落ちる。

「ワゴクヨ~~~~!! デイオオ!!」

《ドウシマシヨウ~~~~!!》

「何つつてるかわかんねんだよっ!! おいコラッ! 近寄んじゃねえ!!」

自らの髪を片手いっぱいを持ち、ミフィアは混乱しながらディオルに近づいた。ディオルはいかにも嫌そうな顔をしている、とりあえずミフィアからはさみを取り上げる。

「ミフィイルバンパルオ~~~~!!」 《カミガ~~~~!!》

「だからわかんねえって! テメエがこんなもん持ってっからだろがつ!!」

彼女の腰の下まであった長く美しい髪は、一掴み程度ではあったが無残にも胸の少し上あたりで揃えられていた。

「デイオオオ~~~~!!」

“くつつけて”とでも言いたげに髪を握った方の手をディオルの前に差し出す。

「どおしろってんだよ!!」

「デイオオオオ~~~~!!」

「オレはディオル、だ!!」

「デイオ!、…ル?」

怒鳴られ、泣いてはいないもののグスンと涙ぐんだ声でミフィアが言つと、上目遣いにディオルを見ながら髪を持つちながら振り回していた手をとめた。

「はじめからそう言っただろ!!…たくっ、っーかもうその髪じゃ

揃えて切るしかねえだろ。」

「……………？イツ？」

《ナンテイツタノデスカ？》

「あゝクソ、しょうがねえなあ、…座れ！」

ディオルがドスンとその場に座り、指でトントンと床を指すと

ミフィアは意味を理解し素直にディオルの前にチヨコンと座った。

フワツ…

はじめて会った時に香った優しい華のような香が、ディオルの鼻をつく。

日当たりが悪い部屋に微かな光の筋が差し込んだ、

少女の艶やかで美しい青紫の髪と

対照的な少年の鮮やかな赤みがかった緋色の髪が並ぶ

ディオルは不満げな顔をしていたものの、持っていたはさみを握り直し

静かに少女の髪に触れた。ミフィアはシャキンシャキンという音が聞こえだすとはじめは何をしているのか不安そうにモゾモゾしていたが、やがてその単調な音に安心したのか眠るように瞳を閉じて落ち着きを取り戻した。

ガチャン

古ぼけた木製のドアを開ケルネットが大きめの紙袋を持ち姿を現す。

「ただいま、ごめんなさい店が解らなくて思ったより時間が……………つて、きやあつ！ディオル！！アンタミフィアに何したのよ！！！」
入るなりドサツと荷物を落としミフィアを指差して壁を背にベットの上に座るディオルに向かい怒鳴る…というより叫びに近い声でルネットが言った。ミフィアは床の上に座りながら

「ルネー　ンバンレルー！」

《オカエリナサイ！》

と明るく言つとトトト…と笑顔で近づく。

髪は数分前とはまったく違い、綺麗に胸の少し下あたりで揃えられ

ていた。

「見て解んねーのかよ。」

「解るわよ！何でこうなったか聞いているの！！」

ぶつきら棒にディオルが答えるが、更に声を荒げたルネットがミフィアの毛先を少しだけ摘み揺らしながら聞いた。

「テメーで切ったなんて死んでも言えるか。」

オレが切ったなんて死んでも言えるか。

しかたがなかったとは言え、やっぱりあんな奴の髪を切ってやるなんてどうかしてる…。

ディオルは内心そう思いながらもとりあえず平常心を装うことに集中する。

考え事が顔に出やすいタイプだと、いつかガウロにバカにされた事があつたからだ。

「そ、そおなの？…まあ、髪色もあまりない色で目立ってたから程度いいけど…」

ミフィアを見ながらやっと納得したようにルネットが言う、その直後何を思ったのかミフィアがクルツとディオルの方を向き、

「ディオ！イヌジョ《マタ》チヨキチヨキな！」

そう楽しそうに笑って指ではさみを使う仕草を試みせたのだった。

「…？どうゆう事？」

「バツ！！別に何でもねーよ！！」

その一言で完璧に平常心を崩し、勢い良く立ち上がり汗りながら答える。

「でもチヨキチヨキって。」

「しつけないだよ！オレは腹減ってたんだ！そいつの服買って来たんならさっさと着せる！飯だ飯！！」

それだけを一気に言うのとドカドカ足音をたて

「準備出来たら呼べよ！」

と声を上げて部屋からでていってしまった。

「何なの？アイツ。」

まったく理解できないわ。と思いながら、しばらく戸口を見ていたが
気を取り直し落とした紙袋を拾いあげ、

「さっ、じゃあ着替えましょっか。」

ニコッと笑いながら袋からさくら色の布を取り出しはじめた。

幾分かたつて、2人の部屋のドアをトンツと一つだけノックすると
何の遠慮もなしにガチャンとドアを開けたと思えば、

「ルネ、腹減つてもう限界いい。」

腹部を押さえて弱々しい声で緑色の髪をした青年が入ってきた。

「ガウロ！返事するまで開けないでっつても言ってるでしょ！……
まったく、でもいい時に来たわね、ちょうど今呼びにいこうと思っ
てたのよ。」

「へ、それはよかつ……あれ？ミフィア何か違うくない？腹減りす
ぎでおかしく見えるとか？」

そう言う目と目をパチクリさせて今し方着替え終わったばかりのミフ
ィアを見る。少女は買ったばかりの服に身を包み

少しはにかんだ笑顔で

「ガウロ、ミフィにあう？」

と聞いた。

どうやらさっそくルネットに言葉を教えられたらしい。

「似合うよ！可愛い可愛い　よかつた俺がおかしいとかじゃなく
て。」

ガウロは素直に感想を言う。

「と言うより、おかしいのは空腹のせいじゃなくてアンタが脳みそ
筋肉バカだかでしょ。」

「ひっぴど！！」

「髪は自分で切ったらしいの、服は私が見立てたのよ？」

「そっか、ルネってば実はこおゆう女の子っぽい好きだよね。」

「

笑いながらガウロが言った。途端に顔色が紅く紅葉していくルネット。

「う、うるさいわね！別にいいでしょ！」

誉めたつもりだったのだが逆効果だったらしい。

ガウロは“ありゃ”と心のなかで呟いたが、

怒る時以外にめったに表情を変えない彼女の照れた顔が見れて、今度は満足気にニッコリと笑う。

「何、笑ってんのよ？」

抑えめの声でルネットがガウロを見る、

これもまた珍しい行動だな、とガウロは思った。

「うん。ルネが可愛いなつて。」

「っ!？」

「ぶくく…ほら、早くディオ太連れて飯行こおぜ」

3人は揃ってディオルを部屋まで呼びに行き、

ガウロ同様弱りきった様子の彼を連れて

やっと4人が集合した所で階段を下り一階にある食堂へ足を運んだ。

そこで初めてこの宿屋の食堂が、外から見た時には想像がつかない

くらい広々としている事が判明した。

ただ明かりは低めの天井の中心辺りに大きくついているだけで、昼

間だというのになぜか薄暗かった。

ルネットを待っている間に食事時は通り過ぎたのか、それともただ

単にこの不気味な宿屋に泊まっている人がいないのか、

とにかく食堂には数える程しか人の姿は見当たらなかった。

がら空きの席にそれぞれつき、注文をする

ミフィアは字を読むことが出来なかったためルネットが代わりに適

当な食べものを頼んだ。

しばらくすると、それまでそわそわとしながら黙っていたミフィア

が口を開く。

「ディオ、ミフィなにあう？」

「…へ？」

ガウロと毎度お馴染みの言い争いをしていたディオルが、初めて気付いたかのような声を上げる。

そして黙ってまじまじと真新しい服を眺めた。

ミフィアはさくら色の薄ピンクの胸のしたまであるベストをはおり、中には大きめの刺繍が施されたややオレンジが入った朱色のワンピースを来ていた。

可愛いらしい色合いが少女の愛くるしい顔を一層引き立てる、

要は

とてもよく似合っていたのだ。

「ヤ〜 デイオ太つてばあ、ミフィアが可愛いからってそんな見づめんなよ〜。」

ガウロが直ぐ様ちやかしに入る。

「ああ！？アホかテメエ！オレがいつこんな奴見つめたってんだ！

！」

「今まさに見つめてたじゃんか〜！このエロおやじい」

「アホかテメエエ！！だあれがエロおやじだあ！！！！」

「デイオ〜？ミフィ

「うつせえな！似合わねーよっ！！！！」

「…。」

まんまとガウロのペースにはまるディオル、結果として勢いで言ったがもともと“似合っている”なんて言う気は更々もっていなかった。

ディオルにしてみれば

闇者^{バルス}が目の前にいるのと何ら違いはないのだから、たとえ姿形が少女であっても

ディオルは憎かった…

あの日

目覚めた時から

自分が唯一はじめから
持っていた気持ちだ。

「デイオル？言つとくけどコレ、私を買ってきたのよ？」

ルネットの声で我に返る、知らない間に料理は目の前に運ばれていた。

向かいではぎこちない手つきでオムライスを食べているミフィアがいた。

隣を見ると、ガウロはすでに頼んだ大盛りミートローフを口に運んでいる最中だ。

…静かになつたわけだな。

デイオルも思いながら注文した大盛りミートスパゲティを一口、
口に含む。

「…デイオル？聞いてた？」

「あ？何が？」

「アンタ一週間雑用決定！！！」

「はあ！！？んだよそれ！意味」

「解んないとは言わせないわ、私のセンスを侮辱したバツよ。」

「ふごふごぐー」

《雑用決定ー》

「何だよ！食いながら話すんじゃないやねえ！！！」

ベシンとガウロの頭を叩き顔を上げると、

ルネットも好物のポトフをぱくりと一口口に運び告げた。

「決定、だからね！」

まだ日が射す時間だということにもかかわらず

この場所と同じように

自分もお先真っ暗だ…そう感じた昼過ぎだった。

「けって〜」

ミフィアの鈴の音のような明るい声が、

響いて聞こえた。

第十話髪と空腹（後書き）

何か今回は少し気分がのらなくてヘンテコな終わりになってしまいました
ましたあゝ 気付けばついに十話突入！！てか、私の小説って話進
のおつそゝゝ……こんな所まで読んでくださったあなた！！本当に
ありがとうございますっ）*O、、艸（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3666a/>

SEENA 1

2010年10月17日07時30分発行